

江戸川乱歩「孤島の鬼」の着想を巡って（補遺）

小松 史生子

はじめに

本稿は、『大衆文化』第23号（二〇二〇年九月）に掲載された論文「江戸川乱歩「孤島の鬼」の着想を巡って」の補遺である。「江戸川乱歩「孤島の鬼」の着想を巡って」では、一九二七年～二八年にかけて乱歩が三重県と和歌山県を旅した事実に着目し、特に紀州沿岸風景と古座浦の九龍島が長編第一作「孤島の鬼」着想のヒントとなった経緯を跡付け、また桑名の財閥・諸戸家の二代目当主が主要登場人物の名前の由来ではないかという推察の蓋然性を追究した。今回は、先回の論文の後に判明した新たな資料の分析に加え、和歌山県古座と串本地域へのフィールドワークを実施し、さらなる調査を行った結果について報告する。

一、雑誌『朝日』創刊号の電報

「孤島の鬼」第一回が掲載された博文館の大衆雑誌『朝日』創刊号（一九二九年一月号）には、「朝日」が世に出るまで」という記事があり（図1）、「孤島の鬼」第一回執筆当時、江戸川

乱歩から森下雨村に送られた電報の写真が載っている。印刷がかすれているため判読し辛いですが、森下雨村研究者の湯浅篤志氏、並びに藤原正明氏が解読をほどこし、当方にご教示いただいたところによれば、次のような文面ではないかと思われる。

アンヲカエルコト三下

「サクヤヤツトミト

ホシツク」一カイブ

ンアスキットオクル」

クシンサンタンオサツ

シラコフ」ヒラキ

（読み下し文）「案を変えること三度 昨夜やっと見通しく一回分明日屹度送る 苦心惨憺御察しを乞う 平井」。

さらに藤原氏の精査により、この電報の発信局が「マトヤ」



図1 『朝日』創刊号(1929年1月)の「朝日が世に出るまで」

と読めることから、乱歩は電報発信時に三重県志摩市磯部町の矢の近辺に滞在しており、記事本文の「遙か伊勢灣の離れ小島へ蟄居すること数週間」とある「離れ小島」は的矢湾に浮かぶ渡鹿野島ではないかという推測がたつた。渡鹿野島は江戸時代から売春業が行われていた島で、昭和の時代に入っても「はし

りがね」と呼ばれる水夫相手の女郎がいた場所である。乱歩は鳥羽造船所に就職していたし、また友人であった鳥羽の民俗学者・岩田準一には『志摩のはしりがね』(一九四〇年)という著作があることから推しても、渡鹿野島の存在は知っていたに違いない。

また、電報の消印が十月であること(日付は判読できない)と、『朝日』創刊号の発売日が一九二八年十二月三日ないしは四日であったらしい事実¹⁰⁾とを突き合わせると、小説の第一回を博文館へ送ったのは遅くとも十月末あたりではないかという見当になる。先の論文では、昭和天皇の伊勢神宮への参詣が十一月二十日であることから、その頃乱歩がこのあたりをうろろろしていたのではないかと推測したが、藤原氏のご教示により戸田文明「昭和大礼と京都府警備」(四天王寺大学紀要 第61号)二〇一六年三月)を参照すると、「大礼特別警戒期間は、六月一日から九月二五日を準備期、九月二六日から十一月三日日を実施期に分けられる(八頁)とある。この記述に基づき、一九二八年の伊勢新聞を確認していったところ、十一月五日の記事に「おとなしい京都も今では目ぐるましい賑ひ方 探照灯電飾のはち合ひで 寝もせず活動するのは警備係と思想係」という見出しで以下のような報道があるのを発見した。

さらに物々しいのは、大礼警衛本部の思想関係方面の活動

部で内務省保安局からは友部保安課長が三十名の先発課員を引具して京都府新〇舎三階に陣取りも、一ヶ月も前から盛んに活躍中の大津警務官と共に「こつちの仕事は夜が本格ぢや」とばかり不眠不休のやうな目玉をぎよろつかせてゐる（傍点は論者）

こうした資料から、親謁の儀の約一ヶ月前あたりから既に警戒態勢が京都〇伊勢周辺に実施されたらしい事実が判明した。この警戒態勢は、当然ながら伊勢に隣接する鳥羽〇志摩付近にも延ばされていたことだろう。「孤島の鬼」第一回が十月末あたり志摩的の矢で完成をみたならば、この警戒態勢に乱歩と岩田は引つかかつたに違いない。

とすると、岩屋島のモデルは九龍島ではなく、鳥羽湾や的矢湾に浮かぶいずれかの島なのであるかという疑念も湧く。しかし、おそらくは完成稿をものするまでの数週間の中に、船であちこちと放浪したことであろうし、また第一回を入稿した後もしばらくは旅を続け、志摩からさらに南下して新宮近辺を再訪したとも考えられる。また、たとえ第一回完成稿は的矢であったとしても、先年訪れた紀州沿岸の風景が想起されてモデルとなった可能性は充分にあるので、やはり和歌山県沖の九龍島は「孤島の鬼」の岩屋島のモデルとして依然候補に数えられよう。

二、紀州沿岸の奇岩風景とアルサーヌ・ルバン

九龍島は、無人島である。黒島とも表記され、古文獻にその名がみえることは、既に先回の論文で指摘した。

このたび、湯浅篤志氏から新たに松川二郎「近畿日がへりの行楽」(大文館書店 一九三五年十月)という資料を紹介いただいた。これは当時の観光案内書の類で、「ぐるじま」という表記で九龍島が記載されている。

また、岩田準一研究者の森永香代氏からは、南方熊楠による「南方二書」に黒島の名が記載されていることについてのご教示があり、「南方熊楠全集」第七卷(平凡社 一九七一年八月)によつて「ご承知の古座浦の黒島も、この桶積と並んでタニワタリの名所なり。小生八年前行、同島植物片つばしから採りしに」という文面を確認した。

こうした資料から推測されるのは、乱歩が紀州沿岸を訪れた当時において、九龍島はかなり著名な島であつたらしいことである。とすれば、乱歩が放浪時にこの島に渡つたかもしれない可能性は高い。やはり一度、九龍島へ自ら渡つて確かめるべきであろう。そこで、森永香代氏に同行いただき、二〇二〇年十二月十八日〇二十日にかけて、新宮〇勝浦〇串本と紀州沿岸へ赴き、九龍島の踏査に踏み切つた。以下は、その踏査の記録である。

現在、名古屋から新宮までは、特急くろしおで約三時間半。

午前十時に名古屋駅を発てば、午後一時三十分あたりに新宮駅に到着する。「孤島の鬼」を乱歩が執筆していた当時に比べれば、雲泥の差のスピードだ。

車窓からは、三重県尾鷲を過ぎる頃から海の眺めがチラチラと見えはじめる。鳥羽や志摩の湾の多い海に比べると、新宮以南の和歌山沖は遙かな外洋に面し、巨岩や奇岩が多く、袈々として雄大な景色が広がる。実際に現地の風景に接すると、「パノラマ島奇談」のような中編の作品世界には本土に近い穏やかな湾を擁する鳥羽や志摩がふさわしいが、「孤島の鬼」のような大長編でスケールの大きい作品世界には、外洋に面して荒波の打ち寄せる奇岩の宝庫な紀州沿岸風景の方がびつたりくるのではなからうかという思いが強くなる。

特に、「孤島の鬼」は「パノラマ島奇談」と異なり、奇岩についての描写が文中に頻発し、重要なモチーフとなっていることから、乱歩の想像力に働きかけた何らかの現実の風景の存在が推察されるのだ。そもそも紀州沿岸は、太平洋プレートとフィリピン海プレートがせめぎあいながら沈み込む接地で、そこにマントルの一部が溶けたマグマが合流して土砂の堆積層を急角度で押し上げ、それが冷却固結して一体化し、多くの巨岩や奇岩を生み出した。特に新宮く串本にかけての沿岸には観光名所として知られる奇岩が多く、たとえば神倉神社の御神体となっているゴトビキ岩（新宮市）、古座川一枚岩（古座市）、

荒船海岸（串本町）、橋杭岩（同上）などが即座に挙げられよう。乱歩は短編から長編へ、小説の構造をシフトさせるためのアイデアを得ようと、一九二七年からこの紀州沿岸を旅するが、この沿岸地域を選んだのは偶然だったのだろうか。その選択動機を推測させ得る資料として、この時期に乱歩が小酒井不木と交わした往復書簡が参考にならう。左記に挙げるのは、江戸川乱歩から小酒井不木宛に出された一九二五年七月七日の書簡の一部である。

座談会からはよせ書きを御送り致して置きましたが、席上、探偵小説を盛んにする為には、何よりもいゝものを書くことが先決問題であること、それには、これまでの創作は余りじみなものばかりで、面白味に欠くる所がある故、もつとりユバン式の変化あるものを書かうといふこと、など申合せました。これは柄にもない小生の發議です。なんとかしてそんなものが書き度いと思ふのです。

大分前から「サンデー毎日」にリュパン風の長い続き物をといふ注文を受けて居りますが、どうも柄にない為手がつけられずそのままにして居ります。併し、さういふものも書かなければ創作探偵小説の普及にならないと信じますので、何とかして書くつもりでは居ります。

（浜田雄介編『子不語の夢』一〇〇〜一〇一頁）

皓星社 二〇〇四年十月)

この往復書簡は、乱歩が一九二五年という時期に早くも長編探偵小説を志向していたことと、その理想型としてモーリス・ルブランがものしたアルセーヌ・ルパンの作品群を意識していた事実とを伝えている。

フランスの作家モーリス・ルブラン (Maurice Leblanc, 1864～1941) は、「アルセーヌ・ルパンの逮捕」(一九〇五年)で颯爽とした怪盗紳士を初登場させて以降、「ルパン最後の事件」(一九三九年)まで、この痛快な快男子の物語を紡ぎ続けた。日本では早くも明治末期には翻案紹介がなされており、先行研究では「サンデー」一九〇九年一月三日号掲載の「泥棒の泥棒」(原作は「怪盗紳士ルパン」所収の「黒真珠」)が嚆矢であるとされている。乱歩は早稲田大学在学中の一九一六年～一九九年にかけての読書メモを『奇譚』と題して一冊の本にまとめたが、その中にルブランについて「原書モ英訳モ未ダ知ラス。春影ノ四訳ニヨッテ間接に知ルノミダ」(CHAPTER4)と書いている。「春影の四訳」とは、三津木春影の翻訳本『古城の秘密(前篇)(後篇)』(武俠世界社 一九二二年～一三年)、『金剛石』(武俠世界社 一九二二年)、(『大宝窟王(前篇)(後篇)』(武俠世界社 一九二二年～一三年)を指すかと推測される。後にルパンの翻訳者として第一人者となる保篠龍緒による初のルパン訳は『ア

ルセーヌ・ルパン叢書1「怪紳士」(金剛社 一九一八年四月)だ。また、『新青年』に初めてルパン作品が紹介されたのは「青い型録」(一九二〇年八月号～十月号)で、これ以降、保篠龍緒によって『新青年』誌上でルパン作品は多数翻訳されていった。乱歩は『新青年』に掲載されたルパン作品を作家デビュー前にリアルタイムで読んでいた。ルパン作品を面白く読んだその当時の記憶が、後年になっても乱歩の胸から去らず、自身の創作の重要な指針の一つとなったと考えられる。

そこで思い当たるのが、ルパン・シリーズの中でも傑作の誉れの高い「奇岩城」である。「奇岩城」は一九〇九年に発表された小説で、ルパン・シリーズにおける長編第一作目にあたる。原題は「L'Arville creuse (空洞の針)」で、中が空洞となっている巨大な奇岩にルパンのアジトがあるという着想の本作は、ルパン作品の代表作とみなされ、現在に至るまで評価が高い。日本での人気も高く、前述の三津木春影「大宝窟王」はこの「奇岩城」の翻訳である。春影訳の印象が強かった乱歩が、長編小説の創作方法をまずは「奇岩城」のテクスト構造に倣うことに求めたという推測は無理がないのではなからうか。

「奇岩城」の舞台となったフランスのノルマンディー地方には、ルパンがアジトにしたような奇岩が実際に数多く存在し、当時も今も観光名所となっている。モーリス・ルブランはノルマンディー地方のルーアン出身で、この地一帯の風景を熟知してい

た。ジャック・ドゥルワール (Jacques Derouard, 1950-) に
よるルブランの評伝によれば、ルブランは一九三三年に語った
思い出話の中で、幼少期にエトルタの断崖を知っていたという。⁸⁾
エトルタの断崖とは、ノルマンディー地域圏セーヌ・マリティー
ヌ県にある石灰質でできた断崖が続く海岸一帯のことで、アー
チ状をなす「アヴァルの門」や「針岩」と呼ばれる奇岩があり、
ギユスターヴ・クールベやクロード・モネが絵に描いたことで
も有名である。ルブランは自身の幼少年期に触れたノルマン
ディーの風景を生涯愛し、ルパンの活躍する物語の舞台として
郷愁をこめて活用したのである。

乱歩は自身の創作を長編へシフトさせるために「奇岩城」に
着想のヒントを得ると共に、自身に印象を深く与えた実際の風
景を活用するルブランの筆^筆に倣^{まね}って、一九二七〜二八年に旅し
た紀州沿岸の奇岩をフランスのノルマンディー地方のエトルタ
のそれになぞらえ、「孤島の鬼」の舞台としたのではあるまいか。
もしくは逆に、彷徨していた紀州沿岸の風景が、ルパンの「奇
岩城」のそれに相似していることに旅の空で気づいたか。こう
した推測のもとに、次なる調査は、実際に紀州沿岸および岩屋
島のモデルの実見というステップに移った。

三、九龍島の踏査

二〇二〇年十二月十九日。いよいよ、九龍島へ渡る。天候は

快晴。眩しく太陽が輝き、十二月とは思えないほど暖かい。ま
さに小春日和そのものの天気^{天気}に恵まれた。申本駅前のバス停か
らローカルバスに乗り、揺られること二十分程度で、古座川の
渡し船の発着場に至る。閑静な屋並みが連なり、その建築の様
子を見るに、昔はこのあたり一帯が船宿であつたらしい名残が
偲^{おも}ばれた(図2)。

そのうちの一軒「藤田渡船」で船を出してもらい、午後一時
頃に乗船する。渡し場からは向かって東南の方向に九龍島はあ
る。太陽を背にした島のシルエットは、主観では岩屋島の描写
に適しているように思えたがどうであろうか(図3)。



図2 古座川から古座の屋並みを眺める

エンジンのかかる船でおよ
そ十分で九龍島に到着した。
手漕ぎの船では、倍の時間が
かかるかもしれない。申本港
からは遠すぎるが、古座漁村
あたりからはじゃっかん近い
か。悩ましいところである。
しかし、実際に島に降り
立ってみると、その風景は岩
屋島を想起させるに足るもの
であった。海水が侵食した洞
穴は島のあちこちに存在して



図3 九龍島の全景



図4 九龍島の洞穴

いて、地下洞窟にこそなっていないものの、神秘的な眺めを作り出しており(図4)、満潮時には海水で満たされる。渚から島の頂上へは険しい石段がこしらえられていた。今回は昇らなかつたが、後日インターネットで検索すると、この石段を上がりきつた所には社があるようだ。『紀伊続風土記』に記載された弁天社であろうか。

船で島を一周してみると、岩鼻が一方に長々と突き出していて、広大ではないが居住スペースも設けられそうな余地がある。九龍島に隣接する島にいた釣り人に聞けば、クエなどの魚の釣り場でもあるとのこと。存外にこの島へは、釣り目的で訪れる人々が多いそうで、船での本土との往来はかなり頻繁らしい。それほどやすく行けるならば、一九二七〜八年当時に乱歩が

九龍島へ渡った蓋然性は十分あり得る。

しかも、土地の人の話によれば、この島では精進蟹という蟹が生息しているのを見ることができるといふ。精進蟹は熱帯、温帯地域の外洋に面した岩礁海岸に生息する蟹で、甲羅は最大で六センチ幅、甲羅表面には毛が密生している。人間の食用に適し、味噌汁の具にもなる。ハサミはあるが握力は弱いので、捕獲するのはたやすいと言われるから、「孤島の鬼」で洞窟内をさまよいるながら諸戸と簀浦が捕まえて食べた蟹は、この精進蟹を想定した着想であったかもしれない。諸戸と簀浦が洞穴で蟹を食する場面は以下である。

「お前たち、ひどく弱っているあんばいだね。腹がへっているんじゃないかね。それなら、ここにわしの食い残りがあるから、たべなざるがよい。食い物の心配はいらないよ、ここには大ガニがウジジャウジヤいるんだからね」

徳さんがどうして生きていたかと、不審にたえなかつたが、なるほど、彼はカニの生肉で飢をいやしていたのだ。私たちはそれを徳さんに貰って食べた。冷たくドロドロした、塩っぱい寒天みたいなものだったが、実にうまかつた。私はあとにも先にも、あんなうまい物を食べたことがない。

私たちは徳さんにせがんで、さらに幾匹かの大ガニを捕えてもらい、岩にぶつけて甲羅を割って、ペロペロと平ら

げた。いま考えると無気味にも汚なくも思われるが、そのときは、まだモヤモヤと動いている太い足をつぶして、その中のドロドロしたものを啜るのが、なんともいえず良かった。

もつとも、諸戸と箕浦が迷い込んだ洞窟については、本文中「地中の石灰岩の層を、雨水が浸蝕して、とんでもない地下の通路が出来て」と諸戸の言葉で説明されており、残念ながら九龍島やその近辺には石灰岩でできた洞穴や鍾乳洞の類はない。藤原氏の示唆では、和歌山県有田市の周辺や三重県志摩半島から西の周辺に石灰岩層の鍾乳洞が見えるようで、とすれば、乱歩は志摩付近の鍾乳洞には行けたであろうから、その記憶を九龍島に合体させて、岩屋島を想像したとも考えられる。または、「奇岩城」の記述を下敷きに用いたとすれば、エトルタの断崖は石灰質なので、それを参照したのかもしれない。

また、テクスト中には初代の回想で、「ちょうど牛のねた形で、どこかの陸が見える」という言があるが、これにびつたり該当する陸地をはっきり指示することはできない。が、新宮く串本間に位置する那智勝浦の海岸には、らくだ岩やライオン島と呼ばれる動物のシルエットに似た奇岩が点在しており、或いはこれにヒントを得た着想ではなからうか。

以上の踏査から、「孤島の鬼」の岩屋島のモデルは、やはり新

宮以南の古座く串本付近および九龍島が有力候補かと推測される。とはいえ、それが唯一のモデルと絞り切るよりも、着想の大半はこの付近の風景として、そこに鳥羽造船所時代の思い出や「奇岩城」からの引用などを組み合わせ、まさに風景のパラメタでジオラマティックに再構成したものと捉えるべきであろう。

おわりに

以上で、「孤島の鬼」着想を巡る補遺論は擱筆するが、和歌山の沿岸風景と乱歩作品のリンクは存外に根深いものがあると考えられる。

というのも、乱歩は一九三六年一月から『講談倶楽部』に「緑衣の鬼」の連載を開始するが、そこでも和歌山の風景を舞台に用いているのだ。⁶⁾ここでははっきり「紀伊半島の南端、Kという田舎町」と設定しており、明らかに串本町のことだとわかる。さらに、そのKという田舎町に住んでいるのが粘菌類の研究に没頭している民間の老学者ときているのだから、モデルは南方熊楠以外の何者でもなからう。老学者の名前は夏目菊太郎で、「孤島の鬼」の箕浦金之助と同じく夏目漱石からの発想が認められる。さらに、ヒロインの名前「芳枝」については、森永香代氏から熊楠の妻「松枝」と娘「文枝」の名前との関連を示唆いただいた。夏目菊太郎の甥の太郎の緑色狂についても、熊楠の

長男が精神病発症で五十三歳で亡くなった事実と符合する感がない。

乱歩と和歌山のリンクについては、今後さらなる調査研究が必要と思われる。

注

(1) 森下時雄『探偵小説の父 森下雨村』一二三頁（文源庫二〇〇七年十一月）

(2) 熊楠が一九二一年八月に松村任三（帝大教授、植物学）に宛てて書いた二通の私信（意見書）。書簡の仲介を頼まれた柳田国男の手で同年九月に五〇部の私家版として冊子の形に編まれ、『南方二書』と題して発行された。後、内容を修正し、第一書簡は『山岳』一九二一年十一月号に、第二書簡は同雑誌一九二二年五月号に掲載された。「黒島」の記載があるのは第一書簡である。

(3) 二〇一二年五月に、ルブランの未発表原稿「ルパン、最後の恋」がフランスで刊行された。この原稿は二〇一一年にルブランの孫娘によって発見されたもので、一九三六年九月にいったん完成されたが、推敲を経ないうちにルブランは脳血栓の発作によって倒れ、この原稿の存在は忘れ去られたとされる。

(4) 乱歩は子供の頃の読書の影響を後の創作の基調とする作家

だった。黒岩涙香や菊池幽芳の影響がその例として挙げられる。

(5) ジャック・ドゥルワール『いやいやながらルパンを生み出した作家 モーリス・ルブラン伝』二四頁（小林江子訳 国書刊行会 二〇一九年九月）

(6) 「緑衣の鬼」は、東京銀座で事件の発端が起こった後、伊豆半島、和歌山へと、物語の進行に連れて風景が移行していく。物語の進行と風景の移行が連動する手法は、「孤島の鬼」で乱歩が編み出した長編探偵小説のテクニクであり、講談社系雑誌での連載第一作となる「蜘蛛男」でも踏襲されている。

本稿の執筆には、湯浅篤志氏、加藤周三氏、藤原正明氏、森永香代氏から貴重なご教示と資料提供をいただいた。厚く御礼申し上げます。

（こまつ・しょうこ 本学文学部教授）